

# 「持続可能な社会の創り手」を育む保育実践のために －幼児教育における ESD による SDGs 教育の試み－

## For practical approaches for nurturing “creators of a sustainable society” : Attempt of SDGs education through ESD in early childhood education

小川 圭子

大阪信愛学院大学 教育学部

### 要約

最近、社会全体で、ESD および SDGs の掲げる目標に向かってさまざまな試みがされている。国内外の教育現場においても、ESD を実践することで SDGs という目標の達成に貢献し、「持続可能な社会の創り手」となる人材を育成していくことが期待されている。本研究の目的は、幼児期における「持続可能な開発のための教育」に関わる教育実践から、保育方法に着目しながら幼児期における ESD および SDGs 研究のあり方について検討することとする。幼稚園の実践事例より、子ども達が社会の様々な課題を自分のこととしてとらえ、解決に向けて身近なところから実践していた。保育の場においては、具体的な取り組みや子ども達の活動につながる情報の共有が必要である。このような技術的な情報共有ならびに教職員をはじめとする関係者が SDGs 教育の意義と価値を深く認識する必要があると考えた。

*Keywords* : 幼児教育 ESD SDGs 実践事例 持続可能な社会

### I. はじめに

我々は、持続可能な社会を生きていくための考え方や課題等、世代を超えて伝えていく義務がある。最近、ESD (Education for Sustainable Development、以下 ESD) および SDGs (Sustainable Development Goals、以下 SDGs) の掲げる目標に向かって、社会全体が一丸となって、さまざまな試みがされている。つまり、人口減少に伴って地域社会の希薄化が進むなかで、我々の生活形態や社会のありようは再構築を迫られている。現行世代だけを視野に入れた開発や発展ではなく、この地球で生きていくことを困難にするような問題について、考え、立ち向かい、解決するための学びが求められる。そうした資質・能力を培っていく手がかりが ESD および SDGs である。

富田ら (2018) は、ESD 教育について「持続可能な開発 : SD」を効果的に推進するためには、これからの地球を担う子どもたちに、教育を通して「持続可能な開発」のありかたを学ぶ機会が重要であるという観点から、「SD」に教育の「Education: E」を加えた ESD (Education for Sustainable Development) = 「持続可能な開発のための教育」とした。つまり、ESD の目標は全ての人が高質の教育の恩恵を享受すること、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすことである。

このように ESD は「持続発展教育」、あるいは「持続可能な開発のための教育」と呼ばれ、特に保育内容領域「環境」をめぐる研究が活発である（篠崎ら, 2021）。その一方で、SDGs は「持続可能な開発目標」を中核として「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」によって、「将来の世代がそのニーズを充足する能力を損なわずに、現世代のニーズを充足する開発」と定義がなされた。

SDGs に示す 17 ゴール（及川, 2021）は、①貧困の撲滅、②飢餓撲滅/食料安全保障、③健康/福祉、④万人への質の高い教育/生涯学習、⑤ジェンダー平等、⑥水・衛生の利用可能性、⑦エネルギーへのアクセス、⑧包摂的で持続可能な経済成長、雇用、⑨強靱なインフラ、工業化・イノベーション、⑩国内と国家間の不平等の是正、⑪持続可能な都市、⑫持続可能な消費と生産、⑬気候変動への対処、⑭海洋と海洋資源の保全・持続可能な利用、⑮陸域生態系/森林管理/砂漠化への対処/生物多様性、⑯平和で包摂的な社会の促進、⑰実施手段の強化と持続可能な開発のためのグローバル・パートナーシップの活性化が挙げられている。

ESD による SDGs 教育は、子どもたちが社会を取り巻く様々な問題に関心を寄せて、好奇心を持って主体的に学ぶことを促すことで、持続可能な社会のための価値形成を目指している。社会の課題について自ら考え行動する経験が、「持続可能な社会の創り手」の育成に大きく寄与するからである。

## II. ESD および SDGs をめぐる実践展開

ESD および SDGs が俎上にあがるまでの動向を表 1 にまとめた。

表 1. ESD および SDGs に関する動向

①	1992 年	リオ・デ・ジャネイロで開催された「環境と開発に関する国際連合会議（国連地球サミット）」で合意された「アジェンダ 21」で ESD について触れられ持続可能な開発のための教育の重要性が指摘された。
②	2002 年	『持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）』で我が国の提案により、『持続可能な開発のための教育の 10 年』実施計画に盛り込まれる。国連第 57 回総会で採択され、2005 年から 2014 年の 10 年間で国連 ESD の 10 年とし、ユネスコを指導機関に指名し世界中で取り組まれていった。
③	2005-2014 年	第 37 回ユネスコ総会において、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」として、ユネスコが ESD の主導機関となる。
④	2015-2019 年	第 37 回ユネスコ総会において、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年」（2005～2014 年）の後継プログラムとして、「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が採択される。日本では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置付けられた。
⑤	2015 年	国連サミットにおいて、先進国を含む国際社会全体の目標として、「持続可能な開発目標（SDGs）が採択された（2030 年期限）。ESD（持続可能な開発のための教育）が質の高い教育に関する持続可能な開発目標に不可欠な要素であると示され、ESD は、このうちの目標 4「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」のターゲット.7 に位置付けられた。ユネスコスクールはグローバルなネットワークとして、国際的・地域的な協同により、創造的な教育にチャレンジし、ESD が全ての持続可能な開発目標の実現の鍵であることが確認された。
⑥	2016 年	2016 年には、ESD を全国各地に広げていくことを目的に、ESD 活動支援センターが設置された。
⑦	2019 年	第 74 回国連総会における「ESD for 2030」は、ターゲットの 1 つとして位置付けられているだけでなく、SDGs の 17 全ての目標の実現に寄与するも

		のである。
⑧	2020-2030年	第40回ユネスコ総会で採択されたESDの新たな国際枠組み「持続可能な開発のための教育:SDGs実現に向けて(ESD for 2030)」。ESDの強化とSDGsの17の全ての目標実現への貢献を通じて、より公正で持続可能な世界の構築を目指した取り組みが行われている。
⑨	2021年5月	学習指導要領の改訂や国際的な動向等を踏まえて「持続可能な開発のための教育(ESD)推進のための手引」の改訂版が作成された。

出典：萩原元昭編『世界のESDと乳幼児期からの参画－ファシリテーターとしての保育者の役割を探る』（北大路書房，2020）、富田久枝・上垣内伸子・田爪宏二・吉川はる奈・片山知子・西脇二葉・名須川知子（2018）『持続可能な社会をつくる日本の保育－乳幼児期のESD－』かもがわ出版、森内利佳「子供と地球の笑顔のために」（2020）<<https://moriuchi-lica.com/2020/03/06/history-of-esd/esd/>>、（閲覧日2022年11月）を参考に筆者が作成。

図1「ESDとSDGs」は、さまざまなESDのプログラムの観点から実践を仕掛け、SDGsを達成するために必要な資質・能力を示したものである。



図1. ESDとSDGs

出典：「ESD推進の手引き」（2018年日本ユネスコ国内委員会発行）

ユネスコスクール（2022）によると、世界中の学校で、幼児間・生徒間・教師間で情報や体験を分かち合い、地球規模の諸問題に対処していくための新しい教育内容や手法の開発、発展を目指されている。具体的には、ユネスコスクールの4つの基本分野である、地球規模の問題に対する①国連システムの理解と人権、②民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育について等、ESDにもとづいた実践が求められている。

我が国において2016年に発表された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、「持続可能な開発のための教育（ESD）は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」（中央教育審議会,2016）と記された。ESDの概念は、平成29（2019）年の幼稚園教育要領改訂の全体の内容に係る前文及び総則において、「幼児教育は、持続可能な社会の創り手」と位置付けられた。

しかし、ESDをめぐる現状は、小学校以上の学校教育現場では環境教育を中心に成果を挙げつつあるものの、就学前教育・保育の領域では多くの保育者が具体的なイメージを抱くところまでに至っていないという（富田ら，2014、無藤ら，2005）。ユネスコスクールの調査（2019年）によると、世界のユネスコスクール加盟校は、182か国で約11,500校、日本の全国の加盟校は1,120校であった。そのうち幼稚園は21園で、都道府県別でみると北海道3園、宮城県4園、千葉県1園、東京都1園、新潟1園、長野県1園、愛知県3園、大阪府1園、奈良県4園、和歌山県1園、広島県1園の内、大学附属園は6園（5園は公立大学附属園、1園は私立大学附属園）であった。

日本における全園数10,070園（2019年）中、加入している幼稚園の割合は0.002%に過ぎない。一步先んじ

ているのが広島大学附属幼稚園であり、「ESD についての実践報告書」(2019)では、「持続可能な社会の担い手の基盤となる能力・態度」を子どもたちに育成する教育課程が開発されている。

ESD についての研究発表動向(2008年から2020年)は、篠崎ら(2021)によると、「理論研究」「実践研究」「動向紹介」の3つの分類指標から計43本が抽出された。「理論研究31本」、「実践研究9本」、「動向紹介3本」で、特に「理論研究31本」には「実践分析22本」、「文献研究5本」、「調査研究」があった。

高田(2016)によると、「環境」「食育」が最も多く、次に多かったのは「世界遺産」「伝統文化」であった。今後の取り組みにおいては、どのような観点で、どの目標に焦点を当て、具体的に組み込んでいくのか、検討していく必要がある。教職員をはじめとする関係者がESDならびにSDGs教育の意義と価値を深く認識しながら、具体的な実践知やスキルを磨いていく必要があるといえよう。

### III. 研究の目的

本研究の目的は、ESD および SDGs 推進を支える就学前教育の内容に着目し、次代を担う人材育成に幼児教育がどのように寄与していけるのか探ることを目的とする。

### IV. 保育の場における SDGs の取り組みについて

#### (1) 園への手続き

2022年5月に湖畔幼稚園、マリモ園の2園に電話で参与観察の内容について説明し、その後、依頼書を郵送し、教育実践の参与観察、ヒアリングの許可願いをした。湖畔幼稚園は、ユネスコスクールに2011年より加盟しESDならびにSDGsに取り組んでいる幼稚園である。マリモ幼稚園はユネスコスクールに加盟はしていないが、ESDならびにSDGsが掲げる伝統文化を尊重する態度や多文化共生に向けた理解の深化を目指して、地域の持つ生活や文化の特性を考慮してアイヌ文化の伝承に取り組み、特に地域の外部講師を招き、アイヌ文化の体験的な活動を交えた保育活動を通年において取り組んでいる園であることから選定した。

#### (2) 倫理的配慮

各園へのヒアリング(湖畔幼稚園は園長、主任、主幹。マリモ幼稚園は園長)については、調査の目的、方法の遵守などについて電話で口頭にて説明し、その後、見学についての依頼書を送付し承諾を得て実施した。特に、個人情報特定されないように細心の注意を払った。ヒアリングの結果挙げられた事例については、文面内容の確認を園長に依頼し掲載することについての承認を得た。さらに写真は、ヒアリングの内容と照合できる写真を研究紀要に掲載することを伝えて、提供していただいた。

#### (3) 調査対象園

北海道釧路市湖畔幼稚園(ユネスコ加盟園)、北海道釧路市マリモ幼稚園(アイヌ文化を取り入れた保育方法の実践)2園を対象とした。

#### (4) 調査時期

2022年9月。

#### (5) 実践事例(聞き取り)

##### ①湖畔幼稚園

###### a) 園の概要

昭和25(1950)年に開園された幼稚園で、2022年4月より幼稚園型認定こども園となり1歳6ヶ月より就学前児を対象とし、定員数は130名である。釧路市街地に位置し、園舎からはかつて日本唯一の炭鉱である太平洋炭鉱が臨める。「神様の愛と恵みのもとに生かされている喜びを分かち合う」キリスト教保育を行っている。平成23(2011)年にユネスコスクールに認定され、環境教育・地域交流・国際理解に基づいた教育・保育活動を大切にしている。

###### b) ユネスコスクールとしての取り組み

ユネスコスクール加盟後はユネスコの理念に沿った取組みを継続的に実施していくことが求められる。当園では「ユネスコ活動カリキュラム」を教育課程に位置づけ、毎年、年間計画を立案し、実践を行っている。SDGsの

ゴールを実現するためのSDGs目標2「飢餓をゼロに」では、食育を通じたフードロス削減と植物の栽培などで食の大切さを学んでいる。

### 【事例1：環境教育】

SDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」、SDGs目標12「つくる責任、つかう責任」、SDGs目標15「陸の豊かさを守ろう」では、具体的な取り組みとして収集活動・美化活動・栽培活動・廃品利用を行っている。廃材利用は、子どもたちの製作に活かせるペットボトル、牛乳パック、トイレトーパーの芯、卵パック、トレ一等で、手作りおもちゃの材料など製作の遊びのアイテムと活用している。収集活動は園児、教職員、地域の方に定着し、子ども自身がその大切さを認識している（写真1）。2021年度は「命をつなぐ～命のサイクルプロジェクト」に取り組み、地場産業理解と栽培、食育活動（写真2）を通して、命の循環について感じることをねらった体験活動を計画し、麦づくりや酪農家、漁業店などの見学を行い、ユネスコスクール助成で購入したピザ窯を使って、ピザを作り試食を行った。子どもにとって楽しい活動を基軸として、食材の栽培・調達からピザが焼き上がる調理の全工程を実体験することで、子どもたちに食べ物を大切に作る心が育つことを報告している。

くわえて、2016年度ユネスコスクール活動実践報告では、ESDアシストプロジェクト助成金を受け、環境教育における地域の特性を活かした木育活動を新たに取り入れたことにより、地元釧路の産業に触れ、地域木材やその加工の工程、木の心地よさやその大切さについて学んでいる。

### 【事例2：地域交流】

SDGs目標11「住み続けられるまちづくり」では、地域と連携した貢献活動を行ない、特に、「地域交流」では近隣の介護老人施設に定期的に訪問し、遊びや歌、踊りなどをともに楽しむ「ふれあいデー」のふれあいタイムは19年目（コロナ禍でリモート交流になって3年目2022年現在）を迎え、子ども、高齢者と共に心待ちにするようになってきている（写真3）。高齢者が身近にいる環境から普段、教師や友達と違ったふれあいができ、豊かな関係性をもって成長している。さらに日頃お世話になっている近隣の方へ栽培活動での収穫物をお礼に持っていくなどして、より一層ふれあいを深めている。

このように、ユネスコスクール活動の3つの大きなテーマである①地球市民および平和と非暴力の文化②持続可能な開発および持続可能なライフスタイル③異文化学習および文化の多様性と文化遺産の尊重)に基づき、年度初めにカリキュラムを立案し取り組み、これらの継続活動を通して、本活動が日々の保育の中に深く浸透し、教師個々が自覚をもって取り組むことで、地域交流の分野で近隣との信頼関係等を深めてきた。特に活動の各テーマが密接に関連し合いながら、地域交流に収斂していくように試みがなされている。教職員がユネスコスクールとしての意識を高く持ち、活動を丁寧に積み上げていくことで、園の保育テーマ「平和をともに」に迫ることになったことを実感している。



写真1. 工作コーナー：ユネスコ活動の一環として、廃材（資源）を工作の材料として収集。



写真2. 食育活動：焼き芋パーティーは自分たちで栽培したサツマイモを焼いていただく。





写真 3.地域交流:コロナ禍のため介護老人施設  
とリモートによる交流。

## ②マリモ幼稚園

### a)園の概要

前田一步園財団の3代目園主、前田光子氏(「阿寒の母」と呼ばれている)がアイヌの生活を守るために、店や住まいのための土地を無償で提供して阿寒湖畔の保全に努めていたことから始まった場「アイヌコタン」に隣接しているのがマリモ幼稚園である。本園は前田一步園財団所有地内に位置していることから、子ども達が一部所有地内を散策することが許可されている。

当園は、昭和53(1978)年に創立し、現在3歳児から就学前児の3クラス編制で定員数は105名である。教育目標は、①丈夫で明るい子に、②豊かな愛情を持つ子に、③のびのびと表現し、挑戦できる子である。令和4(2022)年度の経営方針では「阿寒湖の自然、文化、伝統の良さを生かし『生きる力』の基礎を培い、教育内容の充実を図る」である。

SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」、SDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」について紹介する。

### b)地域のかかわり

「アイヌ文様切り絵」(写真4、写真5)、「マリモお助け隊」(写真6)、「光の森探索」(写真7)、「ヒメマス稚魚放流」等、地域住民の協力のもと阿寒湖の自然と伝統にふれる体験活動を行っている。

#### 【事例3:アイヌ文様の切り絵】

SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」では、アイヌの人々は、自分たちの周りのものすべての生き物に神様が住んでいると考え、敬意を持って生活している。そうした想いを象徴する文様は、生活に必要な衣服や弓、小刀に刺繍をしたり彫ったりして、魔除けの意味を込めて刻んできたものであり、オリジナリティに溢れた文化である。地域の人びとが幼稚園に来て子どもたちと一緒に文様を製作する。子どもたちが作成した文様を色画用紙に張り付け、冠に見立てて立体的に製作することもできる(写真4、写真5)。

#### 【事例4:マリモお助け隊】

SDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」、SDGs目標13「気候変動に具体的な対策を」では、国の特別天然記念物に指定され、また、地域の宝である天然記念物のマリモは、火山活動によって形成され阿寒湖に生息している。しかし、自然災害のため洪水で陸に上げられて鄙びてしまったマリモもある。「マリモお助け隊」を保育活動として立ち上げ、子どもたちはマリモを保護するために地域の人たちと一緒に活動をしている。

子ども達にとって阿寒湖は、マリモの生息地であり、SDGsの一つである環境問題について直に触れることができる環境である。さらに、阿寒湖の保全と保護の活動を地域の方々と一体となって行うことで、連帯感が生まれる。阿寒湖をフィールドに地域の人と触れ合うことで、子どもにはマリモへの関心と愛護心がより一層育まれている。そのような伝統文化の伝承により、ふるさとに誇りと自信をもてる子どもに育てたいという願いが保育の中に生きている(写真6)。

#### 【事例5:光の森探索】

SDGs目標4「質の高い教育をみんなに」、SDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」、SDGs目標13

「気候変動に具体的な対策を」では、アイヌの暮らし支えてきた阿寒湖のアイヌの森には、樹齢 800 年の桂の巨木がそびえ立ち、子どもたちは前田一步園さんの方と光の森を探検しながら、阿寒湖周辺のエゾマツ、トドマツ、シナノキなど阿寒湖周辺の豊かな木々に触れ、その名前や阿寒に生息する鳥類のオオワシ、シマフクロウなどの名前などを確認し伝授していただく。



写真 4.園児が作成したアイヌ文様切り絵。



写真 5.「アイヌ文様切り絵」の体験：地域の人たちからアイヌ文様切り絵の伝授。



写真 6.マリモお助け隊：台風後に阿寒湖へ行き、湖岸に打ちあがったマリモを地域の人たちと拾う。



写真 7.光の森探索：前田一步園さんの方と自然の中で探検しながら、阿寒湖周辺の木々の名前や虫の名前などを伝授。

## V. 考察

ESD の根幹には「人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと」および「他者との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、『関わり』、『つながり』を尊重できる個人を育むこと」という 2 つの観点がある。そのことから、湖畔幼稚園は、地元釧路の地場産業である、酪農や漁業、地域木材などを子どもの発達段階に応じて保育の中に取り入れ、廃材で製作をするなど個々の教師が SDG の認識もっていることが事例より読み取れた。マリモ幼稚園は、まさにこの地域でしか保育活動に取り入れることができない阿寒湖の自然環境を子どもと一緒に地域住民の力をかりながら、アイヌの伝統文化の伝承の活動を行っていた。

実践事例で挙げた 2 園からは、教師一人ひとりが取り組みに自覚もっていること、また、地域の特性を活かした伝統文化に取り組み、なおかつ、家庭や地域社会での教育というアプローチも試みられていた。

富田ら (2014) によると、保育の中に地域の自然環境や文化を取り入れることに新奇さはなく、さらに ESD は

従来の保育理念や方法、活動と大きく変わるところはない。しかし、高田（2016）は、その活動が地域社会や国内、海外につながっていることを意識しているかいないかで違いが現れると述べている。幼児期の子どもは、生活や遊びから、思考力や探求心を培い、喜びや悲しみ、怒りなどを感じながら情緒の安定を図っていく。物事に意欲的に取り組むことで、直接的かつ具体的な体験や経験から学んでいく。

この時期の子どもは、偏見等によって認識を歪められることなく、知識を構築できるきわめて大切な時期である。子ども達が社会の一員として、将来をよりよく生きていくために、家庭・地域社会・幼稚園等の施設で「持続可能な社会」のあり方について、体験的に探っていくことが求められているのである。

## VI. 今後の課題

生活発表会などのイベントテーマとして SDGs の目標を組み込んだり、生活の中で教えられる場面を見つかりたりと、保育にはさまざまな形の SDGs 教育が存在している。日常の保育実践の中に「持続可能な開発のための教育」の内容が含まれていることを銘記しておきたい。その視点や問題意識を教師自身が認識すべきであろう。また、諸外国と比較して、我が国は ESD を実施する際に、教師側が変化を予測して、持続可能な未来を描き、教育実践を変容させていく視点がみられないとの報告もされている（安部ら, 2021）。

子ども達が社会の様々な課題を自分のこととしてとらえ、解決に向けて身近なところから行動していくようになるためには、持続可能な開発のための教育に精通した教師の養成が課題と考える。くわえて、大切なことは、子どもたちが主体的に身の回りの課題を「自分のこと」として取り組み、自分たちのできるところから楽しんで活動できる環境を教師が援助することである。

一人ひとりの子どもの願いを受け止め、子どものために何をすべきかを考えることで、教師自身に SDGs についての理解が深まり、SDGs を浸透・普及させることにつながっていくと考える。

ユネスコスクール内では情報共有の仕組みがあるが、ユネスコスクールの枠組みを超えて様々な SDGs 教育を推進して、「持続可能な社会の創り手」の育成のための教育が発展することを期待される。SDGs 教育の導入は広範囲に及んでいるため、各学校の文化・風土・教育方針などに応じて取組方を検討する必要がある。

既に SDGs 教育に取り組んでいる学校が、どのような観点で、どの目標に取り組んでいるのかなど、具体的な取り組みや子どもの活動につながる地域社会との情報の共有が必要であろう。そういった技術的な情報共有に加えて、教職員をはじめとする関係者が SDGs 教育の意義と価値を深く認識することであると言える。

## 謝 辞

本研究に快くご協力いただいた幼稚園関係者に対して、この場をおかりして深く感謝いたします。

## 利益相反

この研究において利益相反はありません。

## 引用・参考文献

- 1) 阿寒湖アイヌコタン（2022）<<https://www.akanainu.jp>>（閲覧日 2022 年 10 月）。
- 2) 安部由香子・御手洗洋蔵・惟村直公・熊澤恵理子（2021）「農業高校における SDGs と ES 実践の考察—全国農業高校教員・教育実践アンケート調査のテキストマイニング分析から—」, ESD 研究, 4, 36-45.
- 3) 学校基本調査（2019 年）<<https://www.mext.go.jp>>,（閲覧日 2022 年 8 月）。
- 4) 池内 進（2016）「幼児期における「ESD 活動」についての一考察」, 高田短期大学育児文化研究, 11, 65-74.
- 5) IPP 政策情報レポート（2021）「可能な社会の創り手を育てるために—学校における SDGs 教育についての考察—」, 一般社団法人平和政策研究所, 7, 1-8.
- 6) 環境省「地球環境・国際環境協力」<<https://www.env.go.jp/earth/sdgs/index.html>>,（閲覧日 2022 年 8 月）。
- 7) 釧路市立マリモ幼稚園（2022）「令和 4 年度マリモ幼稚園の教育」, 釧路市立マリモ幼稚園, 2-6.



- 8) 釧路市立マリモ幼稚園「園だより」(2022), 釧路市立マリモ幼稚園.
- 9) 萩原元昭編 (2020) 『世界の ESD と乳幼児期からの参画—ファシリテーターとしての保育者の役割を探る』. 北大路書房.
- 10) 保育園でできる SDGs-SDGs を取り入れた保育現場の事例を解説 (2021) <<https://sdgs-connect.com>>, (閲覧日 2022 年 12 月) .
- 11) 松田知明 (2018) 幼児教育における地域との連携による成果と課題 (1) —教員免許状更講習受講者を対象として—, 羽陽学園短期大学紀要 10 (4), 61-74.
- 12) 無藤 隆・塚崎京子 (2005) 乳幼児保育・幼児教育の研究の動向と実践の課題. 子ども社会研究, 11, 130-144.
- 13) 文部科学省「ユネスコスクール」<<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339976.htm>>, (閲覧日 2022 年 8 月) .
- 14) 森内利佳「子供と地球の笑顔のために」(2020) <<https://moriuchi-lica.com/2020/03/06/history-of-esd/esd>>, (閲覧日 2022 年 11 月) .
- 15) 広島大学附属幼稚園「令和元年度実施報告書(要約)(平成 28~令和元年)<[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kenkyu/htm/02\\_resch/0203\\_tbl/1415536\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kenkyu/htm/02_resch/0203_tbl/1415536_00001.htm)>, (閲覧日 2022 年 8 月) .
- 16) 中澤静男 (2018) ESD のための教員研修プログラムの現状と課題に関する一考察「教員研修プログラムのあり方に関する調査研究」報告書をふりかえって, ESD 研究, 1, 5-15.
- 17) 小川早苗監修 (2021) 『アイヌ民族もんようきり絵のせかいへ』, エテケカンパの会.
- 18) 及川幸彦編・大牟田市 SDGs・ESD 推進委員会 (2021) 『理論と実践でわかる! SDGs/ESD—持続可能な社会を目指すユネスコスクールの取組』. 明治図書出版.
- 19) 小野瀬剛志・芳賀哲 (2017) 「持続可能な社会のための教育」としての幼児教育のカリキュラムとサポート・システム—宮城県気仙沼市におけるユネスコスクールの教育実践から—, 仙台青葉学院短期大学研究紀要青葉, 9(1), 29-37.
- 20) 篠崎正典・安達仁美 (2021) 幼児期における「持続可能な開発のための教育」(ESD) の研究動向—領域「環境」の役割を視野に入れて—, 信州大学教育学部研究論集, 15, 188-199.
- 21) 富田久枝・上垣内伸子・片山知子・吉川はる奈・田爪宏二・名須川知子・鈴木裕子・藤原照美・西脇二葉 (2014) 地域で育つ・地域を創る「乳幼児教育における ESD」—日本の保育における継承と創造を目指して—, 千葉大学教育学部研究紀要, 62, 155-162.
- 22) 富田久枝・上垣内伸子・田爪宏二・吉川はる奈・片山知子・西脇二葉・名須川知子 (2018) 『持続可能な社会をつくる日本の保育—乳幼児期の ESD—』かもがわ出版.
- 23) 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園 (2015) 『2014 年度ユネスコスクール活動実践報告』, 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園.
- 24) 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園 (2017) 『2016 年度ユネスコスクール活動実践報告』, 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園.
- 25) 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園 (2022) 『2022 年度ユネスコスクール活動カリキュラム』, 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園.
- 26) 幼稚園型認定こども園湖畔幼稚園 (2022) , <<https://www.kohan.jp>>, (閲覧日 2022 年 10 月) .
- 27) ユネスコスクール (2022) , <<https://www.unesco-school.mext.go.jp/schools/list>>, (閲覧日 2022 年 8 月) .

受理 2024年3月13日

公開 2024年4月1日

<連絡先>

小川圭子

〒538-0053 大阪府大阪市鶴見区鶴見 6-20-28

電話番号 06-6939-4391 (代表)

E-mail : ogawak@osaka-shinai.ac.jp